



Data

監督・脚本: ホン・サンス
 出演: クオン・ヘヒョ/キム・ミニ
 /キム・セビョク/チョ・ユ
 ニ/キ・ジュボン/パク・イ
 エジュ/カン・テウ

👁️👁️ みどころ

韓国映画にホン・サンス監督あり！また、ホン・サンス監督×女優キム・ミニのコンビあり！男女の恋愛劇を会話劇で描く作風は、いかにも韓国的なキム・ギドク監督やパク・チャヌク監督の作風と正反対！おしゃれで風刺の効いたそれは、なるほど、こりゃ韓国のウディ・アレンだ。

脚本なしの映画作りにはビックリだが、なるほど、こういう会話劇ならそれも可能。しかし、その中で男1人女3人による恋愛劇や不倫劇の微妙な面白さを演出するのは至難のワザ。ホン・サンス監督 vs 女優キム・ミニの力量に脱帽だ。

本作から遡って、2人のコンビによる『正しい日 間違えた日』、『夜の浜辺でひとり』、『クレアのカメラ』も必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ホン・サンス監督×女優キム・ミニに注目！■□■

本作のプレスシートにあるイントロダクションには、「カンヌが熱い視線を送った、今、世界一センセーショナルな監督と女優。」と書かれている。それは第70回カンヌ国際映画祭コンペティション部門に出品された本作の公式記者会見で、ホン・サンス監督が「キム・ミニは僕の愛する人。僕の心に入って来て、たくさんのインスピレーションをくれる人だ」と語ったためだ。

映画監督と女優が映画製作の中でどのような（男女の）仲になるのかはさまざまだが、先日BS朝日の「熱中世代 大人のランキング」にゲスト出演した女優、岩下志麻は、夫で監督である篠田正浩との関係について熱く語っていた。映画監督と女優の微妙な関係は、

ロベルト・ロッセリーニとイングリット・バーグマン、ジャン＝リュック・ゴダールとア
ナ・カリーナ、小津安二郎と原節子等において顕著だが、ホン・サンス監督が女優キム・
ミニとはじめてタッグを組んだ『正しい日 間違えた日』（15年）は、第68回ロカルノ
国際映画祭金豹賞、主演男優賞を受賞すると共に、不倫報道がなされた。ところが、彼は
その後も『夜の浜辺でひとり』（17年）、『クレアのカメラ』（17年）、そして本作と、続け
てキム・ミニを起用し続けたからすごい。不倫問題が叩かれる監督や女優が多い中、ホン・
サンス監督のしたたかさ（居直り？）はすごいものだ。

私は、ホン・サンス監督×女優キム・ミニのコンビを本作ではじめて鑑賞したが、今後
『正しい日 間違えた日』『夜の浜辺でひとり』『クレアのカメラ』がシネ・リーブル梅田
で上映されるので、それも鑑賞予定。本作に注目した私は、それらにも大きく期待したい。

■□■ホン・サンスvsキム・ギドク。韓国のウディ・アレン■□■

本作のプレスシートには、中野翠（コラムニスト）の「恋という特殊な病気、療養中。」
と題するエッセイがあり、そこではホン・サンス監督をキム・ギドクとポン・ジュノ、さ
らにヤン・イクチュン（『息もできない』09年）と対比しながら、「この三人の監督作品は、
ずうっと観続けて行きたい監督だなあ、と思っている。一番の決め手は、やっぱり風土感
——。朝鮮半島の土の中から生まれ出て来たという感触が確かにあるからだ。」と考察され
ている。また、ホン・サンス監督インタビューでは、「男女の恋愛を会話形式で描く独創的
なスタイルは、ヨーロッパの批評家や観客に“韓国のウディ・アレン”、“韓国のゴダール”、
“エリック・ロメールの弟子”などと称され、日本でも熱狂的なファンを持つ」と紹介さ
れている。

私がホン・サンス監督作品を観たのは最新作たる本作が最初だが、なるほど、本作は男
女の恋愛を会話形式で描くもの。登場人物の男は1人だけ、そして女はホン・サンス監督
のミューズであるキム・ミニの他、2人だけだ。近時大流行のハリウッドや中国の超大型
活劇ではないから、当然製作費も安いはず。この点ではキム・ギドク監督が常に目指して
いる「吉野家流」の早く、安く、おいしくのモットーと同じだが、常に社会的意識が強い
キム・ギドク作品と全く異なるのは、まさに映画の対象が男女の恋愛に絞られていること
だ。なるほど、だからこそホン・サンス監督は韓国のウディ・アレンと呼ばれているわけ
だ。

しかして、一方で従業員が女子社員1人だけという極小出版社を経営しながら、他方で
評論家としてそれなりの名を成しているという本作の主人公であるボンワン（クォン・ヘ
ヒョ）は、いかなる恋愛を・・・？

■□■頼みはインスピレーションだけ！脚本なしで本作を！■□■

プレスシートにあるホン・サンス監督のインタビューを読んで驚いたのは、「私は脚本な

して撮影します。映画を作り始めるために必要なのは、撮影する場所と2、3人の俳優だけ。残りは自然に生まれるのです。」との言葉。ええっ、脚本なしで映画を・・・？また、彼が本作を作ろうと思ったきっかけは、映画の舞台になった極小出版社の主人と一杯飲みながら話した時に、主人から「家から逃れるために早朝4時に事務所に出勤し、深夜すぎまで帰らない」と言われたことらしい。そこからインスピレーションが湧き、「太陽が昇る前の独特なあの雰囲気の中での通勤路。中華料理屋での昼食、そして彼の妻。これで全部です。映画作りを始めるためにはこれで十分です。」と語っているから、ビックリだ。

このように、彼の映画製作の手法は「毎日、その前日にした事を踏まえて何を撮影するか決める」もの。そのため、彼は「少しずつ脚本を使わなくなった」らしいが、それは、彼には脚本を使うことはあわないためだ。したがって、彼の最初の3作品には脚本があったが、以降は少しずつ脚本のページ数が減り、本作では毎日、その前日にした事を踏まえて何を撮影するかを決め、脚本を全く使わなかったというから、更にビックリだ。私はこれまで、映画は脚本作りが最も大切だと教えられてきた。故・新藤兼人監督は脚本書きに何よりも精力をつぎ込んでいたし、黒澤明監督も絵コンテから脚本作りに費やす労力は大変なものだった。

それに対して、脚本を重視せず、大まかな筋書きだけで詳細は撮影現場で決めるという監督も例外的にいるが、小さな作品ならともかく、国際映画祭に出品されるような作品でホン・サンス監督のように「脚本はいらない！」という映画作りをしている監督は少ないはずだ。しかし、本作を観ていると、なるほど、ホン・サンス監督の脚本なしの映画作りとはこういうものかということがよくわかる。さらに私は大学時代からよく恋愛についての会話（議論）をしていたこともあって、それは男女の恋愛を会話劇で描くホン・サンス監督の独創的なスタイルなればこそ可能だ、ということもよくわかる。

本作導入部では、午前中に面接に来た若い女性アルム（キム・ミニ）との2人だけの昼食の席でボンワンはアルムからいきなり「生きる理由は？」という質問をぶつけられ、小難しい人生論（？）が戦わされるから、まずはそれに注目！なるほど、なるほど、これがホン・サンス監督特有の、脚本なしの会話劇による映画作り・・・。

■□あいまいな日本語では無理？この突っ込み方に注目！■□

英語や中国語を勉強すれば、日本語のあいまい言葉、あいまい表現との違いがよくわかってくる。多分、それは韓国語も同じだろう。映画冒頭、朝4時半に起きて、妻（チョ・ユニ）から出される朝食を食べるボンワンに対して、妻が「あなた、女ができたんでしょう？」「ハッキリ答えなさい！」と執拗に迫る姿は迫力十分だ。もちろん、それを言下に否定すればいいのだが、それをハッキリできないところがボンワンの弱み・・・？

他方、その日事務所に朝一番で面接にやってきた魅力的な女性アルムに対するボンワンの面接試験（？）における質問は直球ばかりで、日本では下手するとセクハラ、パワハラ

と言われる危険があるくらいだ。さらに、アルムの受け答えに興味を持ったボンワンは、その日の昼食を近所の中華料理店で共にしたばかりか、昼間から焼酎を飲み、アルムにもそれを勧めたから、こりゃ日本ではかなりヤバい。その上、帰り道には「堅苦しい敬語はやめよう」と一気に2人の距離を縮めることまで提案したから、これもヤバい。

もっとも、そんなボンワンに対してアルムが「顔が赤くなるから」と焼酎を辞退したのは当然だが、「1つ質問してもいいですか？」と前置きしながら、「生きる理由は？」と質問したのは明らかな韓国流、ホン・サンス監督流で、日本ではありえない風景だ。逆に、これに対するボンワンの回答はかなりあいまいなものだったから、これを聞いている限り、彼が文芸賞の評論員をしている有名な評論家とは思えないが、これはそこではズバリ本音を語ることができなかったためだろう。そんなボンワンの回答に対するアルムのご高説(?)は、あらかじめ準備していたのでは?と思えるほど理路整然としたものだったから、ボンワンはビックリ。

これを見ていた私は、単純にその場で「即採用!」と決めることになるのかと思ったが、いやいや、ホン・サンス監督の本作についての頭の中の構想の演出はそんな単純なものではない。そこから、あっと驚くさまざまな対話劇の展開にビックリ!なるほど、こりゃ面白い!

■□男は軟弱。女はしたたか。本作にもそんな構図が! ■□

俳優の顔と名前を最初から知っていれば混乱することはないが、私にはホン・サンス監督も、女優キム・ミニを始めとする本作の俳優たちもはじめて。そのため、導入部で、ボンワンとアルムの会話劇(面接)のシーンから、いきなり男女が抱き合うシーンに切り替わると、ボンワンのお相手の女優がわからないため、一瞬ストーリーが混乱してしまった。本作のメインストーリーは、たった1日だけの男1人と女3人の動きを追った会話劇だが、監督は三人三様の会話劇の時間軸をあえてごちゃ混ぜにして観客に見せていくので、当初、私はそれに大いに戸惑った。

しかし、ボンワンが抱き合っていた女は前任者のチャンスク(キム・セビョク)であること、事務所に乗り込んできた妻から夫の不倫相手だと誤解されて殴られるのがアルムであることがわかってくると、いろいろな面でなるほど、なるほど……。他方、アルムとチャンスクが鉢合わせになったところでボンワンが見せる対応を観ていると、男のあいまいさがクッキリ!逆に、妻からアルムが不倫相手に違いないと追及されるシーンでは、なぜもっと明快に否定できないのか、と男の軟弱さがクッキリ!さらに、アルムが妻から不倫相手だと疑われていることを知って、こりゃラッキーと目をつけるチャンスクのしたたかさに感心させられるとともに、そりゃいい考えだ、とそれに乗ってしまうボンワンの単純さにもビックリ!結果的に、採用確実と思われていたアルムは、予想もしなかったチャンスクが戻ってきたことによってはじき出されて採用されなかったが、それって彼女にと

ってハッピー？それともアンラッキー・・・？

さらに、本作ラストはそれから数年後、ボンワンの評論が有名な賞を受賞したといううれしい結果になっているが、そこに再びアルムが登場してくるからアレ・・・？アルムは何のために再びこの極小出版社の事務所にやってきたの？そこで、ボンワンが何ともトンチンカンな質問をしたのは一体なぜ？今ボンワンの事務所で働いている女性事務員は一体誰？また、ボンワンと妻との夫婦関係は、今どうなっているの？そして、アルムは、今どこでどんな生き方をしているの？そんなこんなをいっぱい含む、男と女の生き方に注目するとともに、1日の会話劇に見る何とも人間味にあふれた1人の男と3人の女の恋愛を巡る会話劇の面白さに注目！

2018（平成30）年5月2日記